



# シリーズ 子どもたちの発達

『「分かち合える」関係という環境の中で』

～言葉を育てること、気持ちを育てること～

育児雑誌や一般的な育児の相談の中で、よく耳にし目にする内容に、「いくつくらいの子には、どのような関わりをすればいいのでしょうか?!」という、発達や年齢にふさわしい関わり方へのアドバイスを求める問いがあります。

しかし、こうした問いに答えることは、私たちにとっても大変難しいことなのです。

なぜなら、それこそ一般的な子どもの発達の順序性や平均的な時期とか量とかの目安はあっても、ひとりの“その子”についてふさわしいか、何が適切か、ということは必ずしも一致するとは限らないからです。

それが子どもそれぞれの個人差や個性と関連する部分なのですが、多くの大人は、その個人差の幅に検討がつかないことが“不安”の要因になったり、“平均的”な指標を求める理由になっているのだと思います。

「情報」や「マニュアル」を求める前に

子どもの育ちを見る時に、確かに理論的なことや方法を知っておく、理解することは大切なことです。

判断材料の一つの目安として、時には紐解きチェックしてみることも新しい視点を与えてくれるキッカケになるかもしれません。

でも、そうした“一般化”に子どもを当てはめてみる前に、まず、私たち大人が「見て、想像力を働かせて、察してみる」ことをしたいと思います。

生まれた時から、子どもは、唯一の個性を持ったひとりの人間です。誰かや 何かに照らし合わせて比較検討されたり、足し算したり、引き算しながら関わりの手を替え品を替え、ということとはやっぱりやめにしたいと思うのです。

どのような発達段階であっても、あるいは育つことに少々の“早い”“遅い”があっても、まずは、目の前のありのままのその子と向き合うことから始めたいですね。

誰でも、一人の人について理解しようとする時、相手の内的欲求や表現された要求を「どのようなことを示しているのか?!言いたいことは何か?!」「私に どうして欲しいと思っているのだろうか?!」と自分の側の想像力を駆使して推し量ることをしています。

お互い同士が全てのことを話し合ったり、表現しあったりして“わかりあ う”わけではないように、察したり、推し量ったりすることは、たとえ相手が 大人であっても社会的な人間関係の中では欠かせない行為だと思います。

確かに、子どもの言葉を育てたり、自主性を育てたりすることの中に、子どもが自ら意思や欲求・要求を表現し伝えようとすることは重要な意味を持ちます。

大人が察しすぎて、何でも了解してしまうと、むしろ言葉の遅れや自立の妨げになることもあります。

けれど、やはり子どもにとっては、行為や体験に伴った感情表現まで適切に行うことは、とても難しいことなのです。

大人であっても、淋しさ、悲しさ、悔しさなど口で表せないことは多いのではないのでしょうか?!

自分の状況や気持ちにふさわしい言葉や行為を身につけ、適切に表現として 選び取っていく力を育てるには、自分だけの行為だけではなく「～してもらった」という共感や慰め、いたりや励ましといった他者との関わりや感情の“分かち合い”が必要です。

子どもの状況によっては大人の私たちが推し量ったことを言葉にして代弁したり、行為にしてそっと手渡したりすることで、子ども自身が何かに気づき、学びとるキッカケになるでしょう。

様々な行為の中で起きる感情において、子どもにとってマイナス体験は必要なものもありますが、それを矯正したり、教えたりという関わりに終始してしまうと、子どもの中に自己肯定的で社会性に開けた言葉や気持ちを育てることの効果が裏目に出て、自信のなさや依存的、受け身的な姿勢を促してしまうことにもなりかねません。

小さな子どもに、心を表す言葉、相手とつながる言葉、自分と社会を繋ぐ言葉や、それにふさわしい振る舞いを育てていく上で、誰かと共有することや「分かち合う」関係を大人である私たちの側が大切にしたいと思います。

生きた言葉、表現、豊かな感情はマニュアルにはない心のやりとりが育てる部分が大きいことを忘れずに、子育てのあり方も考えていきたいですね。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage  
園長 日下部樹江

